

## 『ヨハネのアポクリュフォン』(ナグ・ハマディ写本Ⅲ)

大 貫 隆

『ヨハネのアポクリュフォン』は、グノーシス主義の神観、宇宙観、人間観、終末論、救済論を神話の形で物語る文書である。その展開の首尾一貫性は、数多いグノーシス主義文書の中でも稀に見るものである。

元来はギリシア語で著されたものであるが、現存するのはコプト語訳の写本四つである。その内の一つ「ベルリン写本」(Papyrus Berolinensis Gnosticus 8502 の第一文書=以下ではBGと略記)はすでに1896年以来その存在が知られていたものである。私はすでにその全訳を詳細な訳注と共に、東京女子大学紀要『論集』第38巻第2号(1988年3月)と同第39巻第1号(1988年9月)で公にしている。

今回新たに訳出するのは、1945年に上エジプトで発見されたいわゆる「ナグ・ハマディ文書」の写本Ⅲに第一文書として含まれるもの(NHCⅢ,1)である。これは前記のBGと共に、現存する四つの写本の中では、いわゆる「短写本」に属する。すなわち、同じくナグ・ハマディ文書の写本ⅡとⅣに含まれる「長写本」に比べると、一部の記事を欠き、その分だけもともと短い写本である。しかも、写本劈頭の4葉と第19葉と第20葉の合計6葉が完全に喪失しているため、同じ「短写本」のBGと比べても短くなっている。

写本Ⅱの「長写本」(NHCⅡ,1)についても、すでに拙訳は完成しており、近く他の場所に印刷・公表の予定である(写本Ⅳの「長写本」は保存状態が余りに悪く、断片的であるため、訳出に値しない)。その後、私としては、三つの写本(BG;NHCⅢ,1;NHCⅡ,1)の翻訳による対観表を作成したいと考えている。それによって、新約聖書の共観福音書について行われるのと同質の文献批判的研究を可能にしたいのである。

この意図から、以下の翻訳は、日本語としての自然さを多少犠牲にしても、正確さを第一とし、特に写本BGとの異同を可能な限り訳文にも反映させるように努めている。例えば、写本Ⅲの原文の構文が写本BGのそれと同じであるような場合には、原則として上記のBGの拙訳と構文的に一致する訳文を心掛けている。このことは構文レベルにとどまらず、単語レベルでも全く同様である。

翻訳本文で用いられる記号の意味は次のとおりである。

[ ] = 破損された本文を校訂者または訳者が推定復元した読み

〈 〉 = 原本の写字生が書き落としたと思われる文または単語

【 】 = 原本の写字生が重複して書き写したと思われる文または単語

( ) = 原本がギリシア語を借用していることを示すため、あるいは文意を取り易くするために訳者が行った補充

なお、段落表示は写本の行数を基準としている。例えば【5,1】は写本の第5葉(頁)第1行、(5),(10),(15),(20),(25)は当該頁の第5行、第10行・・・の意である。しかし、コプト語本文の語順を日本語の訳文に保持することはもとより不可能である。従って、いずれの表示も大方の目安を示すものに過ぎない。

翻訳の底本は M.Krause / P.Labib, *Die drei Versionen des Apokryphon des Johannes im Koptischen Museum zu Alt-Kairo*, Glückstadt 1962, S. 55 - 108 である。現在までのところ、これが唯一の校訂本である。しかし、訳者である私自身が原写本のファクシミリ版 (*The Facsimile Edition of the Nag Hammadi Codices*, Leiden 1976) と下記の欧米語諸訳を参照しながら、校訂者とは異なる読みを採用した箇所が少なくない。そのような場合は必ず訳注に明記している。

参照した欧米語訳と本稿訳注での略号は次のとおりである。

Krause = 上記校訂本に付されたドイツ語の対訳

Kasser = R.Kasser, *Bibliothèque gnostique I: Le livre secret*

de Jean: *Ἀπόκρυφον Ἰωάννου*, RThPh 97 (1964) 140 - 150;

II: versets 1 - 124, RThPh 98 (1965) 129 - 155;

III: versets 125 - 394, RThPh 99 (1966) 165 - 181;

IV: versets 395 - 580 fin, RThPh 100 (1967) 1 - 30.

Tardieu = M.Tardieu, *Écrits gnostiques: Codex de Berlin (Sources Gnostiques et Manichéennes 1)*, introduction, traduction et commentaire, Paris 1984

Till / Schenke = W. Till / H.-M. Schenke, *Papyrus Berolinensis Gnosticus 8502*, Berlin 1972<sup>2</sup>.

## — 本文 翻 訳 —

第【1】 - 【4】葉

欠損

(この欠損部では、BG の対応する部分 = 劈頭の 19,6 - 24,5 と同じように、エルサレム神殿でのパリサイ人アリマニアスとゼベダイの子ヨハネの出会い

に続いて、「救い主」(キリスト)が多様な姿でヨハネに顕現し、至高の存在について教え始めるまでの次第が語られていたものと推定される。)

## 至高の存在について ? — [7,6]

[5,1] <sup>(1)</sup> …彼より先 [に在って彼に] 名前を付け [た者は誰ひとりいないのだから。彼は] 測り難 [き (ἀμέτρῃ[τον]) 光、聖なる] 純粹 [なる (καθα[ρόν]) 潔さ、記述し難き者、完] 全なる者、(5) [不朽なる者である。彼は完] 成 (-τέλειος) [でも (οὐδέ) 至福] さ ([μακάριος]) [でも神性でさえも] なく、むしろ (ἀλλά) [はるかにすぐれた] ものなのである。彼は無限定 (ἄπειρος) ではなく、[限定されたものでもなく、<sup>(2)</sup> むしろ (ἀλλά) (10) [もっとすぐれたものなので] である。彼は身体的 (σωματικός) [でもなければ、非] 身体的 (-σῶμα) でもない。彼は [大きくも] 小さくもない。彼は [どの位の大きさと言えるような者] ではない。彼は如何なる被造物でもない。彼はこのような種類の者ではな [い。] (15) 何人といえども彼を把捉する (νοεῖν) ことは全く (ὄλως) できない。彼はそもそも現に存在しているものの中の何かではなく、むしろ (ἀλλά) もっとすぐれたものである。(しかし、それは) 彼が (それ自身として) すぐれたものであるかのような意味ではなく (οὐχ ὅς)、むしろ (ἀλλά) 彼は (すべてのものから全く異なった) 独自の本質の者であるから、アイオン (αἰών複数) の一部に与かる (μετέχειν) ということがないからである。(20) 彼には時間 (χρόνος) というものが属さない。というのは、或るアイオン (αἰών単数) の一部に与かる (μετέχειν) 者 (がいるならば、(彼以外の) 他の者 (単数) がまず先に彼を準備したはずであるから。彼には時間が分与されていない (ὁ[ρίζ]ειν)。なぜなら、彼は他の誰からも (何かを) 受け取るということがないからである。[6,1] 彼は欠乏す [ることがない。彼に] 先立つ [者は誰もいない。<sup>(3)</sup>] なぜなら、彼は [自分自] 身を [光の完成の中に求めながら、また、その混じり気なき (ἀκέραιον) 光の] 中で認 [識 (νοεῖν) しながら存在する] のであるから。<sup>(3)</sup> (5) 測り [難き大きさ、永遠なる者]、永遠性 [を分け与える者、光]、光 [を分け与える者]、[生] 命、[生命を分け与える者]、至福なる者 (μακάριος)、至 [福 (-μακάριος) を分け与える] 者、認識、[認識を分け与える] 者、(10) [常] に [善 (ἀγαθόν)] を行ふ善なる ([ἀγαθός) 者、彼がこのような者であるのは、彼が (これらを) 持つ [ているから] ではなく (οὐχ οἶον)、[むしろ (ἀλλά οἶον)] 彼が恵みを分け与えるから [である。] 恵 [みを分け与える恵] み、測り難き光。[あの把捉] し難き者 — (15) とはすなわち、[光] の像のことである — について [私は] 君に何を語ったらよいであろうか。<sup>(4)</sup> 私は、私がそれ

を理解 (νοεῖν) し得るであろうところに従って—というのも (γάρ) [一体誰が] いつの日か彼を理解する (νοεῖν) であろうか—君に語ろう。<sup>(4)</sup> 私は、私が彼を理解 (νοεῖν) し得るであろうところに従って語ろう。彼のアイオーン (αἰών) は不滅 (ἀφθαρτος) である。(20) 彼は安息の中に在り、沈黙の中に安らいでいる。彼は万物に先立って存在する者である。彼はすべてのアイオーン (αἰών複数) の頭である。なぜなら、<sup>(6)</sup>もし彼のそばに誰か別のものがあることになるとすれば、それらすべてのアイオーン (αἰών複数) を率いる (χορηγεῖν) のは彼の善良さ (-ἀγαθός) だからである。<sup>(6)</sup> (25) この測り難き方に係わる事柄を知る者は、<sup>(7)</sup>[7,1] こ [の方の中に住んでいた者を除い] ては (εἰ μὴ [τι])、我々の中には誰ひとりとしていない。[これらのことを私たちに語ったのは] 彼である。[彼は、彼] を取り囲んだ [自分の光の中で自己] 自身を把握する (νοεῖν) [者、とはすなわち、生命] の水の [泉 ([πηγή),] (5) 清浄さ (εὐλικρινής) に [満ち満ちた光、活ける] 水を与える [靈 (πνεῦμα) の泉 ([πηγή])] である。<sup>(8)</sup>

#### 光の世界 【7,7】 — 【14,9】

[そして] 彼はすべ [ての] アイオー [ン] (αἰώ[ν]複数) と彼らの世 [界] (κόσ[μος]) の支 [度] (ἐπιχορη[γεῖν]) を進めた。しかもあらゆる [形] で。(彼は) (10) 自 [分] を] 取り巻く純粹なる (καθαρόν) 光 [の] 水の中に彼自 [身] の像 (εἰκών) を見たとき (それを認識した)。すると彼の「思考」(ἐννοια) が活発になって現れた。[それ («思考」は光] の輝き (λαμπηδών) の中から彼の [前へ] 歩み出た。(15) —すなわちこれが万物に先 [立] つ力 (δύναμις) であり、[万] 物のプロノイア (πρόνοια) であり、(このプロノイアは) 見えざる者 (ἀορατος) の [影像] ([εἰκώ]ν) の光の中に輝いている。それは完全なる (τέλεια) 力 (δύ[να]μις)、バルベロン、栄光の完 [全] なるアイオーン (αἰών単数) である。(20) 彼女は彼を褒め称えた。彼女は彼に [よって] 現れたからである。そして彼女は [彼を] 褒め称えた。これが最初の「思考」(ἐννοια)、[彼の] 影像 (εἰκών) である。彼女は第一の [人] 間となった。これはすなわち、処女なる (παρθενικόν) 靈 (πνεῦμα) のことであり、[8,1] 三 [倍男性的なる者、三倍の] 賛美 (ῦμνος)、[三つの名前と三] つの力 (δύ[να]μις) を備えた者、老 [いることがなく、] 男 [女なるアイオーン (αἰών) であり、(5) 彼のプロノイアから現れ] 出た ([προ]σέρχεσθαι) 者である。[彼女、すなわ] ち [バルベ] —ロンは「第一の [認識] を [自分に与えてくれるようにと] 彼に請い [求めた] ([αἰ]τεῖν)。すると彼は [それを承] 認した。彼が承 [認] した (κατα]νεύειν) とき、「[第一の] 認識」が彼に現れ [出た。] (10) それは「思考」(ἐννοια) —とはすなわち「プロ [ノイア]」(πρό[νοια])

のことである—と共に立 [つて]、見えざる (ἀόρατον) [霊] と完全なる力 (δύναμις)、すなわち [バルベロン] を褒め称え続けた。なぜなら、それ(「第一の認識」)は [彼女] によって在るようになったからである。[再] び (πάλιν) 彼女は自分に「不滅 [性]」 (ἀφθαρσία) を与えてくれるように請い求めた (αἰτεῖν)。[する] と (15) 彼は承認した (κατανεύειν)。彼が [承] 認した (καταν[εύειν]) とき、「不滅性」 (ἀφθαρσία) が現れてきた。それは「思考」 (ἐννοια) および「第一の [認識]」と共に [立ち] ながら、見えざる (ἀόρατον) 霊とバルベロンを褒め称え続けた。なぜなら、彼らは彼女 (バルベロン) に [よつて] 在るようになったからである。(20) 彼女 (バルベロン) は自分に「永遠の生命」を与えてくれるように請い求めた (αἰτεῖν)。すると彼は承認した (κατανεύειν)。彼が承認した (κατανεύειν) と [き]、「永 [遠] の生命」が現れてきた。それは立ちながら、彼とバルベロンを褒め称え続けた。なぜ [なら]、[9,1] それらは彼女 (バルベロン) ゆえに見えざる (ἀόρατον) 霊 (πνεῦμα) の啓 [示] によつて在るようにな [った] からである。これらが「第一の人間」で [ある] 父のアイオン (αἰών) の五個 [組] である。(5) すなわち、見え [ざる] 者 ([ἀ]όρατος) の影 [像] —とはすなわち、バルベ [ロン] のことである—、「思考」 (ἐννοια)、「第一の認 [識]」、「不滅性」 (ἀφθαρσία)、および「永 [遠] の生命」である。これが男女的なる五個組であり、父の十のアイオン (αἰών) である。(10) それから彼女、すなわちバルベロンは純粹なる (εἰλικρινής) 光をじつと見つめた。そして彼女は彼の方へ向きを変え、(そして) 至福なる光に似た光の飛沫 (-σπινθήρ) を生み出した。しかし (ἀλλά)、(15) それ (三人称・男性・単数 = 「飛沫」) は偉大さにおいて等しくはなかった。これが父の中に現れた独り子 (μονογενής) であり、神的なる「アウトゲネース」 (αὐτογενής) であり、万物の父のもとにあるものの中に最初に生まれた御子であり、<sup>(11)</sup> 混じりなき (εἰλικρινής) 光である。<sup>(11)</sup> (20) 見えざる (ἀόρατον) 霊 (πνεῦμα) は、その光を、すなわちあの第一の力、つまり、彼の「プロノイア」 (πρόνοια) なるバルベロンによつて現れてきたその光を喜んだ。彼はそれを彼自身の至善 (-χρηστός) によつて塗油した。<sup>(12)</sup> [10,1] そこで (ὥστε) それは完全 (τέλειος) かつ欠乏なき者となり、キリストと [なつ] た。なぜなら、それは見えざる (ἀόρατον) 霊 (πνεῦμα) の至善 (-χρηστός) で塗油されたからである。[彼は] 彼 (見えざる霊) の前に現れ出た。<sup>(13)</sup> (5) そして彼は処女なる霊から塗 [油] を受けた。〔塗油〕それから彼は [彼] (見えざる霊) の前に立ち、見えざる (ἀόρατον) 霊 (πνεῦμα) を、また、彼がその方 [により] 現れ出ることになった方を褒め称えた。それから (10) 彼は自分に叡知 (νοῦς) を共に働く者として与えてくれるように求めた (αἰτεῖν)。見えざる (ἀόρατον) 霊 (πνεῦμα) がそれを承認した (κατανεύειν)。叡知 (νοῦς) が現れてきた。それはキリストと共に立ちながら、彼

とバルベロンを褒め称え続けた。これらすべてのものは (15) 沈黙 (σιγή) と思考 (ἐννοια)<sup>(14)</sup> の中に成立したのである。見えざる (ἀόρατον) 霊 (πνεῦμα)<sup>(15)</sup> はことばによって或る事を為すことに決めた。すると彼の「意志」(θέλημα) が形を取って現れてきた。それは叡知 (νοῦς) と光と共に立って、彼 (見えざる霊) を褒め称えた。(20) その「意志」の後には「ことば」<sup>(17)</sup> が続いた。なぜなら (γάρ) キリストはことばによってすべてのものを創造したのであるから。神的なる「アウトゲネース」(αὐτογενής)<sup>(18)</sup>、「永遠の生命」、「意志」(θέλημα)、「叡知」(νοῦς)、「第一の認識」(πρόγνωσις) は (25) 立って、[11,1] 見えざる (ἀόρατον) 霊 (πνεῦμα) とバルベロンを褒め称え続けた。なぜなら彼 [らは] 彼女のによって在 [るようになっ] たからである。大いなる見えざる (ἀόρατον) 霊 (πνεῦμα) [は、] 神的なる「アウト [ゲネ] ース」(αὐτο[γεν]ής)、(5) バルベ [ロン] の息子を完成し、<sup>(19)</sup> 大いなる [見] えざる (ἀόρ[ατον]) 霊 (πνεῦμα) の [傍ら] に立つもの ([παρ]άστασις)<sup>(20)</sup> とした。神的なる「アウトゲネース」(αὐτογενής)、[すなわち、キ] リストこそ、彼 (見えざる霊) が大いなる栄誉 (τιμή) を [もって] 称えた者である。なぜなら (ἐπεὶ) 彼 (アウトゲネース) は最初の「思考」(ἐννοια)<sup>(21)</sup> [か] ら在るようになったからである。(10) この (アウトゲネース) を見えざる (ἀόρατον) 霊 (πνεῦμα) はすべてのものの上に神として任命した。彼は自分の中に宿っている真理を彼 (アウトゲネース) に従わせた (ὑποτάσσειν)。それは彼にすべてのことを把握 (νοεῖν) させるためである。すなわち、ふさわしい者たちにその御名が語られることになるであろうその彼が。(15) その光 — とはすなわち、キリストのことである — と「不滅性」(ἀφθαρσία) から、見えざる (ἀόρατον) 霊 (πνεῦμα) なる神によって、四つの大いなる光が神的アウトゲネース (αὐτογενής) から現れ、彼の傍らに立つもの (παράστασις) となった。(20) 三つのものとは「意志」(θέλημα) と「永遠の生命」と「思考」(ἐννοια) であるが (δέ)、彼に属する四つのものとは、「恵み」(χάρις) と「理解」(σύνεσις) と「知覚」(αἴσθησις) と「思慮」(φρόνησις) である。「恵み」(χάρις) は第一の光アルモゼール — とはすなわち、[12,1] 第 [一の] アイオン (αἰών) の天使 (ἄγγελος) — と共にある。そして彼 (アルモゼール) のもとには、三つの [アイオー] ン ([αἰώ]ν 複数)、「恵み」(χάρις)、「真理」(ἀλήθεια)、「かたち」([μ]ορφή) がある。第二の光は (5) [オーロ] イアエールで、彼 (アウトゲネース) が第二のアイオン (αἰών) の中に立てた (καθιστάναι) ものであり、そのもとには [三] つのアイオン (αἰών) がある。すなわち、「[プロノイ] ア」([πρόνοι]α)、「知覚」(αἴσθησις)、「想起」(μνήμη) である。[第] 三の光には彼が<sup>(23)</sup> (10) 第三のアイオン (αἰών) の中に立てられ [た] (ἀποκαθι[στάναι])<sup>(24)</sup>。その [もとには三つのアイオン (αἰών) がある。]<sup>(25)</sup> すなわち、「理解」(σύνεσις)、「愛」(ἀγάπη)、「現

象」(ιδέα)である。第四の光には彼が<sup>(26)</sup>第四のアイオン(αἰών)の中に立てられた(ἀποκαθιστάναι)。そのもとには三つのアイオン(αἰών)がある。すなわち、(15)「完全」(-τέλειος)、「平安」(εἰρήνη)、「知恵」(σοφία)である。これらが神的なる「アウトゲネース」(αὐτογενής)のそばに立っている四つの光であり、『神と(その)決定(εὐδοκία)によって』御子のそばに、(20)また、大いなる「アウトゲネートル」(αὐτογενέτωρ)キリストのそばに立っている十二のアイオン(αἰών)であり、神と見えざる(ἀόρατον)霊(πνεῦμα)の決定(εὐδοκία)によるものである。これら十二のアイオン(αἰών)は御子、すなわち、「アウトゲネース」(αὐτογενής)に属する。<sup>(27)</sup>「第一の認識」と(25)完全なる(τέλειος)叡知(νοῦς)から、神により、また、大いなる見えざる(ἀόρατον)霊(πνεῦμα)の決定(εὐδοκία)により、【13,1】「アウトゲネー[ス]」(αὐτογενή[ς])の面前で、完全なる(τέλειος)真の人間、<sup>(28)</sup>聖なる(ἅγιος)者、最初の者(三人称・単数・男性)が(現れてきた)。彼らはその名前をアダマスと呼び、(5)第一のアイオン(αἰών)へ、すなわち、神的「アウトゲネース」(αὐτογενής)なるキリストのそばへ、つまり第一のアイオン(αἰών)の中へ、ハルモゼールのそばに置いた(ἀποκαθιστάναι)。<sup>(29)</sup>彼の力(δύναμις)が彼と共にあった。そして見えざる(ἀόρατος)者が(10)彼に凌駕し難い精神の(νοερά)力を付与した。すると彼(アダマス)は言った。『私は見えざる(ἀόρατον)霊(πνεῦμα)を褒め称えます。すべてのものはあなたのゆえに在るようになったのであり、あなたへと向かっています。私はあなたとアウトゲネース(αὐτογενής)(15)とあのアイオン(αἰών)<sup>(30)</sup>、すなわち、父・母・子なる三つの者、完全なる力(δύναμις)を褒め称えます』<sup>(31)</sup>それから<sup>(32)</sup>彼らは彼(アダマス)の息子のセーツを第二のアイオン(αἰών)の中に、第二の光オロイアエールのそばに置いた(ἀποκαθιστάναι)。(20)第三のアイオン(αἰών)の中へ<sup>(33)</sup>彼らはセーツの子孫(σπέρμα)を置いた(ἀποκαθιστάναι)。それは聖徒たちの魂(ψυχή複数)のことであり、(その=第三の)アイオン(αἰών)の中で、【14,1】第三の光ダベイテのそばに在った。<sup>(34)</sup>第四のアイオン(αἰών)の中へ<sup>(35)</sup>彼らは、自分たちのプレーローマ(πλήρωμα)を知ったのに、直ちには悔い改め(μετανοεῖν)ず、(5)むしろ(ἀλλά)しばらくの間ためらい、その後(初めて)悔い改めた(μετανοεῖν)者たちの魂(ψυχή複数)を置いた(ἀποκαθιστάναι)。彼らは第四の光であるエレレートのもとに留まり、あの場所に集まって、見えざる(ἀόρατον)霊(πνεῦμα)を褒め称えるであろう。

過失 【14,9】 — 【15,22】

(10) さて、我々の仲間なる姉妹、すなわち「知恵」(σοφία) は一彼女(もまた)一つのアイオーン(αἰών)であったので一自分の内から或る考えを抱くに至った。彼女は霊(πνεῦμα)の考え(ἐνθύμησις)と「第一の認識」によって自分の中から自分の影像を出現させたいと欲した。<sup>(36)</sup>『彼女のこの考え(ἐνθύμησις)は(15)無為(ἀργόν)のままではいなかった。そして彼女のわざが不完全(ἀτέλεστον)な形で現れ出た。その外貌(μορφή)には形(μορφή)がなかった。というのも、彼女は彼女の伴侶(σύζυγος)なしに(それを)作り出したからである。それには母親の姿(ἰδέα)に似た形(τύπος)がなかった。』<sup>(36)</sup> 霊(πνεῦμα)は同意(εὐδοκεῖν)も(οὐδέ) (20)承認(κατανεύειν)も(οὐδέ)していなかったにもかかわらず。また、彼女の伴侶(σύζυγος)、すなわち男性なる、処女なる(παρθενικόν)霊(πνεῦμα)も(οὐδέ)同意(συνευδοκεῖν)していなかったにもかかわらず。彼女は彼女の伴侶(σύζυγος)をまだ見いださぬままに、(すなわち)霊(πνεῦμα)の同意がないまま、【15,1】彼女自身の(ἴδιον)賛同者(σύμφωνον)が知らない中に、(自分で)承認(κατανεύειν)した。彼女は彼女の内にある守備隊(φρουρικόν)<sup>(37)</sup>のゆえに完全であった。<sup>(38)</sup>彼女のこの考え(ἐνθύμησις)は(5)無為(ἀργόν)のままではなかった。そして彼女のわざが不完全(ἀτέλεστον)な形で現れ出た。その外貌(μορφή)には形(μορφή)がなかった。というのも彼女は彼女の伴侶(σύζυγος)なしに(それを)造り出したからである。それには母親の姿(ἰδέα)に似た形(τύπος)がなかった。彼女が(10)思案しつつ見てみると、それは別の形(μορφή)、ライオンと蛇の外貌になっていた。彼の目は炎のような光を放っていた。彼女はそれを自分のそばから投げ捨てた。かの場所(τόπος)から外へ。それは(15)不死なる(ἀθάνατος)者たちの誰一人としてそれを見ることがないようにするためであった。というのも、彼女はそれを無知の中に産み落としてしまったからである。彼女は彼に光の雲を巻き付けて、その雲の真ん中に玉座(θρόνος)を置いた。それは(20)聖なる(ἅγιον)霊(πνεῦμα) — これはすべて生ける者の母と呼び習わされている者である — の他には(εἰμήτι)誰も彼を見ることがないようにするためであった。そして彼女は彼にヤルダバオートと名前を付けた。

やみの世界 【15,22】 — (【19, ?】)

これが第一のアルコーン(ἄρχων)である。彼は母親から多くの力(δύναμις)を引き



出していた。【16,1】そして彼は彼女から遠ざかり、或る場所から或る場所へと、彼が生まれた場所から離れた。彼は（それとは）別の場所（τόπος複数）を手に入れた。彼は（5）自分のために光の火の炎のアイオン（αἰών）を創り出した。彼は今なおそこにいるのである。彼は彼と共なる「無理解」と結び付いた。彼は彼に従う諸力（ἐξουσία）と十二人の天使（ἄγγελος）を生み出した。（10）そして彼らのそれぞれが彼らのアイオン（αἰών）を、不朽の者たちを範型（τύπος）として（創り出した）<sup>(39)</sup>。彼らは自分たちのために七人の天使（ἄγγελος）を創り出した。また、その天使（ἄγγελος）たちは第一の範型（τύπος）—これは彼より先に在るものである—の外見に従って、三つの力（δύναμις）を（創り出した）。（15）この諸力（ἐξουσία）たちが「アルキゲネートル」（ἀρχιγενέτωρ）、すなわち暗黒と無知の第一のアルコン（ἄρχων）から現れてきた。その諸力（ἐξουσία）たちはそろって（ἅμα）彼らを生み出した者の無知<sup>(40)</sup>の中にあつた。（20）彼らの名前は次のとおりである。第一の者はハオート、第二の者はハルマス—これは火の目のことである—第三の者はガリラ、第四の者はヨーベール、第五の者はアドーナイオス、第六の者はサバオート、（25）第七の者はカイン・カミン、【17,1】すなわち、人々が太陽と呼んでいる者である。第八の者はアビレシヤ、第九の者はヨーベール、第十の者はアルムピアエール、第十一の者はアドーニン、第十二の者はベリアスである。（5）彼らは確かに（μέν）欲望（ἐπιθυμία）と怒り（ὀργή）から由来する別の名前をもっている。<sup>(41)</sup> これらすべて、すなわち端的に（ἀπλῶς）彼らの名前—彼らが上なる世界の栄光によって呼ばれるときの名前—は二重なのである。（10）もし彼らが真実（ἀλήθεια）に即して呼ばれたならば、それら（の名前）は彼らの本性（φύσις）をあらわにするものである。そしてサクラスは想像（φαντασία）と彼らの力に従って彼らの名前を呼んだ。<sup>(41)</sup> さて（οὖν）、（15）その栄光によって彼らは遠ざかり、弱くなり、これらによって力を得て大きくなるのが普通である。<sup>(42)</sup> そして彼は七人の王たちが天（複数）を支配し、五人の王が混沌（χάος）と奈落界の上に支配することに定めた（κελεύειν）。（20）七つの天の上にいる者たち—彼らの名前は次の通りである。第一はアオート、ライオンの顔をした者、第二はエローアイオス、驢馬の顔をした者、第三はアスタファイオス、ハイエナの顔をした者、【18,1】第四はヤゾー、ライオンの外貌をした竜（-δράκων）の顔をした者、第五はアドーナイオス、竜（-δράκων）の顔をした者、第六はアドーニン、（5）猿の顔をした者、第七はサバダイオス、ぎらつく炎の顔をした者である。これが週（σάββατον）の七個組である。これが世界（κόσμος）を支配する者たちである。それから（τότε）ヤルダバオートは—とはすなわち、（10）サクラのことである—多面相（-μορφή）であるので（ὥστε）、その決するところに従って（πρός）あらゆる姿（顔）で現れる。彼は彼の火を彼らに分け与えた（μερίζειν）。しかし（δέ）、混じり気なき（εἰλικρινής）光—とはすなわち、（15）

彼が母親から取り出して (<sup>43</sup>ἀποσπᾶν) いた力 (δύναμις) のことである — これは彼らに分与しなかった。彼が彼らの上に君臨したのはこのため、すなわち母親から彼に備わっていた力 (δύναμις) の光の栄光のためである。このゆえに彼は (20) 自分を彼らの上なる「神」と呼び、<sup>(44)</sup> (そのことによって) 彼がそこから由来している本質 (ὕπόστασις) に反逆した (-πεῖθειν) のである。そして彼は勢力 (δύναμις 複数の不定冠詞つき) を諸力 (ἐξουσία 複数の不定冠詞つき) と結び付けた。彼が語ると、それによってそれら (の勢力) が成立した。(25) 彼はそれらに名前をつけ、任命した (καθιστάναι)。・・・

### 第【19】 — 第【20】 葉 欠損

(この欠損部では、並行する BG 43,10-46,15 と同様に、自己の配下の「勢力」と「諸力」を任命し終わったヤルダバオートの思い上がり、自分の欠乏に気付いた「母親」(ソフィア)の動揺について物語られていたと推定される。)

#### 「ソフィア」の後悔と回復 (【19, ?】 — 【21,18】)

【21, 1】 [彼女は] 後悔 (μετανοεῖν) し、[大いに] 泣いた。[彼女の後] 悔 ([μ]ε[τά]νοια) の祈りを彼らは聞いた。そして彼女 [のために] 彼女の兄弟たちが (代わって) 願い求めた (παρακαλεῖν)。すると (5) 聖なる (ἅγιον) 見えざる (ἀόρατον) 霊 (πνεῦμα) が承認した (κατανεύειν)。彼は彼女の上に彼らの [プ]レーローマ ([π]λήρωμα) から聖なる (ἅγιον) 霊 (πνεῦμα) [を] 注ぎかけた。すると (彼女の) 伴侶 (<sup>45</sup>σύζυγος) が彼らの欠乏を回復するために [下って] きた。(10) 彼 (見えざる霊) は或るプロノイア (πρόνοια) によって彼女の欠乏 [を回] 復することを彼 (伴侶) に許した。そして彼女は彼女 (本来の) アイオーン (αἰών) [へ] は引き [揚げ] られず、むしろ (ἀλλ[λλά]) 彼女において明<sup>(46)</sup> らかとなつ [た無知のゆえに]、(15) 彼女の欠乏 [を回復するまでの間]、第 [九] の天に [とどまっているのである。一つの声] が 彼女のもとへ届いた、[「[人] 間」と「[人間の] 子」が [存在する] と。]

#### 心魂的人間の創造 【21,18】 — 【24,20】

ところが (δέ) [これを] 第 [一] のアルコーン (ἄρχων) ・ヤ [ルダバオート] が聞 [いた。]

彼は (20) その声が [彼の母か] らやって来たのだ [と考えた。聖なる完] 全なる ([τ]έ-  
 λειος) [父が「第一の人間<sup>(47)</sup>」] として彼らに現れ [た。] 至福なる者 (μακάριος) は  
 彼の外見 (ιδέα) を [彼らに現した。] 【22,1】すると権力 (ἐξουσία) の [アルコーン  
 たち] 全体 ([ἀρχοντικῆ] が首肯いた (κατανεύειν) <sup>(48)</sup>。彼らは水 [の中] にその  
 像 (εἰκό[v]) の形 (τύπος) を認 [め] て、互いに [言った]、『我々は (5) 神の像  
 (εἰκόν) に従って (κατά)、また、その外見に従って (κατά)、[人間を造ろ] う』。  
 そして彼らは自分たちの間 [から]、また、すべ [ての] 彼らの勢力 (δύναμις) たちと  
 一緒に (それを) 創造した。彼らは自分たちの [間] から、一つのこしらえもの (πλάσμα)  
 を造り上げた (πλάσσειν)。そして、かの勢 [力] (δύν[αμις]) たちのいずれもが、(10)  
 それぞれの力から、一 [つの心] 魂 (ψυχή) を造りだした。それ (三人称・女性・単数=  
 勢力) は (その心魂を)、その固有の像 (εἰκόν) 一とはすなわち、それ (勢力) が見た  
 像であるが一に従い、太初 [から存在する者]、すなわち、[完全なる ([τέλειος])  
 人間] を [模] 倣 ([μί]μησις) しつつ (κατά) 造った。そして彼ら (=彼女ら=勢力  
 たち) は (15) 言った、『[彼をアダムと名付けよう。この者の名] 前 [と] 彼の力  
 (δύνα[μις]) とが [我々にとって] 光と [なるように。]』そして勢力たちは] 下 [から  
 始めた。] 第一は「[神] 性」で、(彼女が造ったものは) <sup>(49)</sup> (20) 骨の [魂] (ψυχή) であ  
 る。[第二は]「支 [配]」で [髓] の魂 (ψυχή) である。[第三は]「熱」で [肉] の  
 ([σαρκι]κός) [魂 (ψυχή) および身] 体 (σώμα) の [全構造である。] 【23,1】第  
 四はプロノイ [ア] (πρόνοι[α]) で、[髓] の魂 (ψυχή) である。第五は「王 [国] で  
 血] の魂 (ψυχή) である。第六は「[理] 解」([σύ]ννεσις) で、齒の魂 (ψυχή) と (5)  
 身体 ([σ]ώμα) 全体である。第七は「知 [恵]」(σο[φία]) で、髪<sup>(50)</sup>の魂 (ψυχή) であ  
 る。彼らはその人間全体 [を] 飾り付けた (κοσμεῖν)。そして彼女ら (=勢力たち) の  
 天使 (ἄγγελος) たちが [彼女ら] に加わった。そして彼らは諸力 (ἐξουσία) [たち]  
 によって準備されてあつた心魂 (ψυχή) [から] (10) [肢] 体 (μέλος) と関節 (ὄρμος)  
 の [心魂] 的 ([ψυχ]ή) 実体 ([ἰ]πόστασις) を創り出した。そして繋がり合つた  
 (δραμάζειν) [身体 (σώμα) 全体が、私がすでに名前を挙げた] 天 [使] (ἄγγε[λος])  
 たちの [群れによって造り出された。] <sup>(51)</sup> ] ところが彼 (アダム) は (15) 長い間 (χρόνος)  
 ) 動け [ない ([ἵπο]λύειν) まま] であつた。[というのは] 七人の [諸] 力 ([ἐξουσι]ία)  
 も関節 (ὄρμος) を整 [え] た他の [三百] 六十人の天使 (ἄγγελος) たちも、彼を立  
 て起こすことができなかつた (οὐδέ) からである。さて [あの母] 親は (20)、多情  
 (προύνικος) ゆえに、かのアルコーン (ἀρχων) [に与えてしまった] 力 (δύναμις)  
 を引き出したいと欲した。[彼女は邪] 意なしに父、[すなわち] 憐れみに富む者に、また、  
 五つの光に請い求めた。【24,1】彼は聖なる決 [定] に基づいて彼の四つの [光] を、プロ

トアルコーン (πρώταρχων=「第一のアルコーン」=ヤルダバオート) の天 [使] (ἄγγελος) たちの姿 (τύπος) で送り出した。そ [して彼らは] 彼 (第一のアルコーン) に助 [言した] が、(5) それは (ὅστε) (他でもない) 彼の中からのあの母親の力 (δύναμις) を引き出すためであった。(すなわち) 彼らは彼にこう言ったのである。『あなたの息 (πνεῦμα) を彼 (アダム) の顔に吹き込みなさい。そうすれば、この物は立ち上がるでしょう。』そこで彼は彼 (アダム) の中へ (10) 或る氣息 (πνεῦμα) — これは母親の力 (δύναμις) のことであり、第一のアルコーン (ἄρχων) から (出て行くものである) — をその身体 (σῶμα) の中へ吹き込んだ。[すると直ちに彼は] 動いた。[そして] 彼 (第一のアルコーン) よりも力強い者と [なった。すると他の] (15) 諸力 (ἐξουσία) [も妬み始めた。彼は] 彼らすべてによって存在するようになったのである [から] ([γάρ])。[彼らが] その人間 (アダム) に彼らの力 (δύναμις) を [与えていたのであり]、彼は彼らの心魂 (ψυχή)、[すなわち]、七つの諸力 (ἐξουσία) [の心魂] と [彼ら] の力 (δύναμις) をもらって (φορεῖν) <sup>(52)</sup> いたのである。(それにも拘わらず) [彼の] 思考は彼を造 [った者たち] よりも、また、第 [一] のアルコーン (ἄρχων) よりも強くなった。

#### 光とやみの力の角逐 【24,20】 — 【32,22】

(20) さらに (δέ) 彼らは、彼が彼らよりも [賢い] がゆえに悪 (κακία) から自 [由である] こと、また、彼が光 [に移って] しまっているのに気付いた。彼らは彼を捕らえると、物質 (ὕλη) 界全体の底へと [引きずっていった。] (25) 至福なる (μακάριος) 父は [善を行う] 者 【25,1】 であり、また、憐れみに富む者であるので、<sup>(54)</sup> [あの母親の] 力 (δύναμις) — とはすなわち、(第一の) アルコーン (ἄρχων) [か] ら引き抜かれてしまった力のことである — を憐 [れんだ。] そして (5) [それは、それ (=力) が] <sup>(55)</sup> あの身体 (σῶμα) の上に支配するようにするためであった。彼は、善を [行い憐れ] みに富む彼の霊 (πνεῦμα) を送った。(物質界へ) 最 [初] に下ってき [た] 者 — 彼は (10) [アダム] と名付けられた — の助け主 (βοηθός) として。(すなわちそれは) 光のエピノイア (ἐπίνοια) であり、彼 (アダム) によって、「ゾーエー」(ζωή) と呼ばれ [た者] である。[さて彼女こそは] 全 [被造物に働きかける者である。それ (被造物) と共に労苦して、そのプレー] ローマ ([πλή]ρωμα) へと [立て起こし、(15) その欠] 乏 ([ὄ]στέρημα) が下ってきた次第について説き明 [かし]、その [昇ってゆくべき道] を教えることによって。そして、[光] のエピノイア (ἐπίνοια) は彼 (アダム) の中に隠れた。[それは] アルコーン (ἄρχων) たちが気付かず、(20) [むしろ (ἀλλά)] 我々の仲間なる姉

妹、[我々に等]<sup>(56)</sup>しい知恵(σοφία)が光のエピノイア(ἐπίνοια)によつ[て]彼[女]の過失(ὑστέρημα)を正すようになるためであった。すると【26,1】かの人[間]は彼の中に在る[影のゆえに]光り輝いた。彼は[彼を]造つた者たちよりも[高ま]つた。諸力(ἐξουσία)のアルコーン[たち全体](ἄρχων[τ]ικῆ)が同意した(κατανεύειν)<sup>(57)</sup>。(5) (そして)かの人間が彼らを凌[駕している]のを見た。彼らは天使(ἄγγελος)たち、アルコーン(ἄρχων)たち、およびその他の勢力たちと協[議]した。そこで(τότε) [火と]土が水[および]炎と互いに混じり合つた。(10) それらは【四つ】の風[と一緒に]混ぜ合わされて、[火]のように吹き荒れ、互いに[結]合し合つた。それらは大い[なる震動]を巻き[起こ]した。[彼らは彼を死の影]の中へ[連れ込んだ。彼らは] (15) 再び[また]別のこしらえ物(ἀνάπλασις)を土と水と[火]と風(πνεῦμα) [から造り出した。]とはすなわち、物質(ὕλη)、暗闇、[欲]望(ἐπιθυμία)、および模倣の[靈](ἀντίμιμον[πνεῦμα])<sup>(58)</sup> [から。] すなわち、(20) これこそ我々の鎖、身[体](σῶμα)のこしらえ物(ἀνάπλασις)の[洞]窟([σπήλαιον])であり、人間の上に強[盜たちが]着せ付けたもの、忘却(λήθη)の鎖である。[こう]して人間は死ぬのが[常の者とな]つたのである。これこそ(25) 最初の下降であり、【27,1】最初の分裂である。ところが先在の(πρόων)[光]の「[思]考」([ἐ]ννοια)が彼の中に在つ[て]、彼の思考を[立て起こ]す。(5) そして第一のアルコーン(ἄρχων)は彼を[捕らえ]、樂園(παράδεισος)の中に置[いた。]こ[れ(樂園)について]彼は、それが彼(アダム)にとって無上の歓[び](τρυφή)であると語つたが、これはつまり彼(アダム)を欺く(ἀπατάν)ためであった。なぜなら(γάρ)<sup>(59)</sup>[彼らの食]物([τ]ροφή)は苦み、彼らの(10) [麗]しさは不法なもの(ἀνομον)、彼らの食[物]は偽り(ἀπατή)、彼らの木は憎[悪]、彼らの実(κάρπος)は癒す術のない毒、彼らの約束は彼ら]にとって[死]であつたからである。<sup>(60)</sup> [だが(δέ)] (15) その木は【生命の木】として(その中に) [置かれた。しかし] その彼らの生命の奥[義](μυστήριον)が一体何であるか、私が君たちに告げ[よう。]それはすなわち、彼らの模倣[の靈](ἀντίμιμον[πνεῦμα])であつて、彼らの[間]から由来するもので、彼(アダム)に後ろを向かせて(20) 彼のプレーロー[マ](πλήρωμα)を知る(νοεῖν)ことがないようにするた[めで]ある。その木というのはつぎのような[種類]のものである。(すなわち) その根は軽蔑され、[その]枝(κλάδος)は[死]の影、その葉は憎しみ【28,1】と欺瞞(ἀπατη)、その樹脂は邪惡(πονηρία)[の]香油、その実(κάρπος)は死の欲望(ἐπιθυμία)であり、その種子(σπέρμα)は暗闇の[中に]芽を出した。(5) それを食べる者たち、[彼らの]住み家は陰府である。[しかし(δέ)、]彼らによ[つて]【善[悪]を知るこ]と」と呼ばれるあの木、これはすなわち光のエピノイア(ἐπίνοια)のことであり、

(10) 彼女ゆえに彼女から食べては [ならぬ]、とはつ [まり]、彼女に聞いてはならぬという戒め (ἐντολή) が発せられたのである。なぜなら [それ (戒め)<sup>(61)</sup> は、彼 (アダム) が彼の完成] を [見上げて、(15) そのプレーロー] マ ([πλήρω]μα) [から自分が (失われて)] 裸である [ことに気付く (νοεῖν) ことがないようにと、彼に] 敵対するものであったからである。しかし (δέ)、私は [彼が] (その木から) 食べるようにさせたのである。<sup>(62)</sup>

そこで [私は彼に言った]、<sup>(63)</sup>「主よ、彼を [教] え (てそうさせ) たのは蛇ではなかったのですか。」

彼は微笑みながら [言った]、(20) 「蛇は彼らに汚れた欲望 (ἐπιθυμία) による滅びの生殖行為 (σπορά) を示したのである。というのも、それが [彼 (=蛇=ヤルダバオート) にとって] 役立つ (εὐχρηστος) ようにそうしたのである。<sup>(64)</sup> 彼は彼 (アダム) が彼よりも [賢くな] ったために、彼に従わなかった [こと] に気付いた。(25) 彼は彼 (アダム) の中から [29,1] あのか (δύναμις) [を] 抜き取りたいと思った。彼はアダムの上に恍惚状態 (ἐκστασις) をもたらした。」

しかし (δέ)、私は彼に言った、「主よ、恍惚状態 (ἐκστασις) とは何のことですか。」彼は微笑んで言った、(5) 「君はモーセが [彼 (神) は彼 (アダム) を眠らせた] と書いたようにであると考えたのか。否、むしろ (ἀλλά) 彼 (蛇=ヤルダバオート) は彼 (アダム) の知覚 (αἴσθησις) の上 [に] 知覚不能状態 (ἀναισθησία) を上げたのである。それは実に (καὶ γάρ)、彼が予言者 (προφήτης) を通してこう言った通りである。(10) [私は彼らの心の耳を [重] くしよう。それは彼らが悟る (νοεῖν) ことも見ることもな [い] (οὐδὲ) た [めでである]。】その時に (τότε) 光 [のエ] ピノ [イア] ([ἐ]πί-ν[οια]) は [彼 (アダム) の中に身を隠した。そし] て彼 (ヤルダバオート) は彼女を彼 (アダム) の [あばら骨] から取 [り出そうと心に決めた。] (15) そのエピノイア (ἐπί-νοια) は捕らえ [難い者] である。やみがその光 [を] 追いかけて (διώκειν) 続けたが、<sup>(65)</sup> その光を捕らえることはなかった。[そこで] 彼は彼 (アダム) の中か [ら] あのか (δύναμις) を抜き取りたいと思っ [た。] そして (20) 女の形 (μορφή) をした [こし] らえ物 (ἀνά[πλ]ασις) を造った。そして [彼は] (それを造って) 彼 (アダム) の前に [立たせた。] (しかしそれは) モーゼが、[彼はあばら骨を取って、女を造 [り]、彼のそばに置いた] [と] 言ったよう [にではな] い。【30,1】すると直ちに彼 (アダム) は死の醜態から目覚めた (νήφειν)。エピノイア (ἐπίνοια) が彼の心の上に置かれていた被いを取り去った。すると直ちに彼は彼に似た彼の連れ合い (συνουσία) を知った。(そしてこう言った、) (5) 【今や、おまえこそ私の骨の骨、私の肉 (σάρξ) の肉 (σάρξ)。<sup>(66)</sup> それゆえに人は父と母を離れるであろう。(そして) 妻と結び合い (κολλ[ᾶ]ν) (10) 二人は一つの肉 (σάρξ) となるであろう<sup>(67)</sup>】。 [なぜなら、あの母親] の伴侶 (σύζυγος) を

遣わされたからである。彼女の欠〔乏〕(ὕστερη[μα])を正すために、<sup>(67)</sup>このゆえに〔アダムは彼女〕を〔『すべて生ける者の母』〕と〔名付けた。(15) 高さ〕<sup>(68)</sup>ところからの支配と認識の〔啓示とに〕基ついてエピノイア(ἐπίνοια)が、その木を使い、驚(ἀετός)の〔姿で彼(アダム)を教〕えた。<sup>(68)</sup>彼女は、その認識〔から〕食べて、(20) 彼らのプレーローマ(πλήρωμα)を思い〔起こす〕ようにと〔彼に〕教えた。二人の欠乏(πτῶμα)は〔無〕知に〔あったか〕らである。しかし、ヤルダバオー〔ト〕は彼らが自分から離反した〔ことに〕気付いた。彼は〔(彼らを)呪〕った。それに加えて(προσποιεῖν)、〔女〕については、(25)『おまえの夫が〔おまえを〕治めるであろう』〔ということ〕にした。〔しかし彼は、〕聖なる高みの領域の決定において〔31,1〕(その時)すでに生じ〔ていた〕奥義(μυστήριον)を知らないままにそうしたのである。しかし(δέ)彼らは彼をとがめること、また、その彼の無知を彼の天使(ἄγγελος)たちにあばくことを憚った。それから彼は彼らを楽園(παράδεισος)から投げ出した。(5) 彼は彼らを大いなる暗闇で覆った。その時(τότε)ヤルダバオートは、アダムの傍らに若い女(παρθένος)が立っているのを見た。ヤルダバオートは無知でいっぱいになった。そして彼女から(自分の)種子(σπέρμα)を生じさせようと欲し続けた。(10)〔そこで〕彼は彼女を辱め、(そして)〔一番目〕の息子を、続いて同じように(ὁμοίως)〔二番〕目の息子をもうけさせた。熊(-ἄρκος)の顔付きをした〔ヤ〕ウアイと猫の顔付きをしたエロー〔イム〕である。その一方は(μέν)義〔なる〕(δίκαι[ος])者であるが、〔他方〕は(δέ)不義なる(ἄδικος)ものである。(15) エ〔ローイム〕が義なる(δίκαιος)者、ヤウアイが不〔義なる〕(ἄδικος)者〕である。義なる(δίκαιος)者〔を〕(μέν)彼らは火と〔風〕(πνεῦμα)の上に立て(ἀποκαθιστάναι)、不義なる(ἄδικος)者を(δέ)土と〔水〕の上に立てた。これがあらゆる(20) 種族(γενεά)の〔間で、アベルとカ〔イン〕と呼ばれて今日に至っている者たちである。この第一のアルコーン(ἄρχων)に〔よっ〕て結〔婚〕(γάμος)の交〔接〕(συνουσία)が存続することになったのである。そして〔彼は〕アダムに欲望(ἐπιθυμία)の生殖(σπορά)を植え〔付けた。〕〔32,1〕それは彼らが交〔接〕(συνουσία)によって、彼らの模倣(ἀντίμιμον)の霊(πνεῦμα)によって、彼らに似たもの(影像)を生み出してゆくためであった。<sup>(69)</sup>その二人のアルコーン(ἄρχων)を彼らはいくつかの要素(ἀρχή)の上に立てて(ἀποκαθιστάναι)、(5) 彼ら(二人)が洞窟(σπήλαιον)を支配するように(ὥστε)した。彼(アダム)は自分自身の不法さ(ἀνομία)を知り、セツをもうけた。アイオーン(αἰών複数)の高きところに住むあの種族(γενεά)のもとで(κατά)と同様(ὁμοίως)、(10) あれ母親のもとへ<sup>(70)</sup>彼女自身のものなる(ἴδιον)霊(πνεῦμα)が送られた。それは彼に<sup>(71)</sup>等しい者たちをプレーローマ(πλήρωμα)を〔手〕本(τύπος)としつつ呼び起こし、〔彼らを〕忘却から、

また、洞窟 ([σ]πήλαιον) の邪悪 (κακί[α]) から連れ [出す] ために。そして『そして』 [彼女<sup>(72)</sup>は] (15) しばらくの [間 (πρόσ-) 留まり]、(セーツの) 種子 (σπέρμα) [のために働] いた (ὑπο[οργεῖν])。それは、大いなるアイオン (αἰών複数) のもとか [ら] 聖なる (ἅγιον) 霊 (πνεῦμα) [が到来するならば、彼らを] 彼らの欠乏 (ὑστέρημα) から立て起こしてアイオン (αἰών単数) の (20) 正し [い回復] ([κατόρ]θωσις) [へ] もたらし、[それ<sup>(73)</sup>が聖なる] プレーローマ (πλήρωμα) となり、彼らが最早欠けるところのない者たちとなるためである。」

### 人間の相異なる運命 【32,22】 — 【36,15】

[私] 自身は言った、「主よ、あらゆる (人間の) [魂] (φ[υχή]) が [混じり] 気なき ([εἰλι]κρινής) (25) 光 [へ] と救われるのですか。」

彼は [私に] 言った、「君は (今や) 大い [なる] 事柄に考え (ἐννοια) をめぐらすところまでやってきた。【33,1】それは揺らぐことのない (ἀσάλευτος) 種族 (γενεά) から来る者以外には (εἰμήτι) 現すことが難しい (δύσκολον) ものである。生命の霊 (πνεῦμα) が (5) その中に到来し、あの力 (δύναμις) と結び付くのが常である者たちは完全なる (τέλειος) 者たちとして救われるであろう。そして彼らはこれらの大いなる光にふさわしい者となるであろう。なぜなら (γάρ), 彼らはかの場所で、あらゆる邪悪 (κακία)、悪意 (πονηρία) の惑わしから [常に] 清められる (καθαρίζειν) からである。その際、彼らは (10) 不朽なる (ἀφθαρτον) 集 [会] 以外 (εἰμήτι) には気を [配ら] ず、また、それ (集会) のことを思い量り (μελετάν) ながら、今から [後] は 怒り (ὀργή)、妬み、[恐れ]、欲望 (ἐπιθυμία) そして飽 [食] (πλησμο[ν]ή) を離れる。彼らはこのすべてに捕らえられることはな [い]。 (15) ただ [肉 (σάρξ) という] 補充の実体 (προσυπόστασις) のみを [例] 外 ([εἰμ]ήτι) として。というのは彼らは迎えの者たち (παραλήπτωρ) に [よって] 永遠の生命 [と] (そこへの) 召命の尊厳さの [中へ] 受け入れられる (παραλαμβάνειν) であろう [時を] 待ち望む間は、(それを=肉を) 用いる (χρησθαι) のである。<sup>(76)</sup> (20) その際には、彼らは戦い (ἄθλον) を [勝ち抜き]、永遠の生命 [を嗣] ぐ (κληρονο[μ]εῖν) ために、あらゆることに耐え (ὑπομένειν)、すべてのことを忍ぶ [であろう。]

しかし (δέ) [私は] 彼に言った、「主よ、このように [し] なかった者たち (25) — 彼らの魂 (φυχή) は何なの (=どうなるの) ですか。【34,1】あるいは (ἦ)、生命の霊 (πνεῦμα) とあの力 (δύναμις) がその中に入った者たちはどこへゆくことになるのですか。彼らは



救われるのでしょうか、それとも救われないのでしょうか。」

彼が私に言った、「生命の靈 (πνεύμα) がその中に入った<sup>(77)</sup> 者たちは、(5) どのような場合にも (πάντη πάντως) 救われるであろう。彼らは常に邪惡 (κακία) を逃れる。なぜなら、(なるほど) あの花 (δύναμις) はすべての人間の中に入ってゆく。というのは (γάρ)、その力なしには彼らは立てないのである。人間が生まれると、(10) その時に (τότε) 生命の [靈] ([π]νεύμα[α]) が模倣の [靈] (ἀντίμιμον π[νεύμα]<sup>(78)</sup>) にもたらされるのが常である。もし生命の靈 (πνεύμα) が [生命に到来する] 場合には、それは力強いものであるがゆえに、[魂] —とはすなわち、あの花 (δύναμις) のことで [ある] — [を] 強 [める] のが常であり、(15) (もはや) それ (魂) を惡 (πονηρία) の中へ迷い込ませる (πλανάν) ことは [ない] —模倣の靈 (ἀντίμιμον πνεύμα) がその [中へ到] 来しつつある者は、[それ (模倣の靈) によつ] て誘惑されて、迷わされる (πλανάν<sup>(79)</sup>) のが常である。」

そこで (δέ) 私は [言った]、「主よ、[このような者たちの] 魂 (ψυχή) ですが、(20) それ (複数) は肉 (σάρξ) を離れる [なら] ば、どこへ [ゆくことになるのですか。]

すると (δέ) 彼は微笑んで言っ [た]、「その魂 (ψυχή) —とはすなわち、あの花のことである —が模倣の靈 (ἀντίμιμον πνεύμα) より [はるかに勝っている] —という [のも、それ (魂=力) は] 力強いからである —なら [ば、それは] 惡 (πονηρία) [を] 離れるものである。(25) そしてそれは [不] 朽なる ([ἀ]φθαρτον) 配慮 (ἐπισκοπή) によって救 [われ]、【35,1】アイオーン (αἰών 単数) の安息 (ἀνάπαυσις) へ引き上げられるであろう。」

そこで (δέ) 私は言った、「主よ、万物を<sup>(80)</sup> 認識しなかった者たち、彼らの魂は何なの (どうなるの) ですか。あるいは (ἢ)、どこへゆくことになるのですか。」

(5) 彼は私に言った、「彼らの上には模倣の靈 (ἀντίμιμον πνεύμα) が重くのしかかってしまったのである。そうして彼らが倒れた (σφάλλειν<sup>(81)</sup>) 時に、彼らの魂 (ψυχή) [は] 抑えつけ (βαρεῖν) られてしまったのである。それ (魂) は惡 (πονηρία) のわざへと引きずられてゆき、忘 [却の中へ] 連れてゆかれた。(10) こうして彼らは、肉体 (σώμα) を [脱] いた後は、かの (第一の) アルコーン (ἄρχων) に [よつて] 生まれた諸力 (ἐξουσία) の [手に] 引き渡される。そして彼らは再び (πάλιν) [彼] らを (世界の) 他の部分 (μέρος) へ [投げ込む]。そ [して (15) 彼らは] 彼らを連れて [あちこち動きまわるのである。彼らが] 惡 (πονηρία) と忘 [却] の中 [から救] い出されて認識 [を得]、<sup>(82)</sup> こうして [完全にされるならば]、救われる [ことになるであろう] その時まで。<sup>(82)</sup>」

そこで (δέ) 私 [は彼に言っ] た、「そして、主よ、どのようにして (20) 魂 (ψυχή)

は [少しずつ収] 縮し、再び (πάλιν) 母親の自然 (の身体) (φύσις) の中へ、あるいは (ἦ)、夫の [中に入ってゆくのですか。]

すると (δέ)、[私が] 尋ね [たとき]、彼は喜び、(そして) 私に言った、「[君は] 君がその後 [に従っ] た者<sup>(83)</sup> において幸い (μακάριος) である。(25) 確かにそれ (魂) は [36,1] 生命の霊 (πνεῦμα) の場所で他の者に与えられ、その者の後にそれ (魂) は従い (ἀκολουθεῖν)、その者に聞き、そして救われるのである。しかし、今から後はもはや肉 (σάρξ) の中へ入ってゆくことはない。」

そこで (δέ) 私は彼に言った、(5) 「主よ、認識したのに、ひるがえってしまつて者たち、彼らの魂 (ψυχή) は何なの (どうなるの) ですか。あるいは (ἦ)、どこへゆくのですか。」

彼は私に言った、「(彼らはゆくであろう) 貧困の [天] 使 (ἄγγελος) たち、すなわち何の悔い改め (μετάνοια) も生じなかつた天使たちがゆく (χωρεῖν) であろう場所 (へ)。(10) [彼ら] は刑 [罰] (κολλάζειν) を受けるその日まで (そこに) 拘禁されているであろう。聖なる (ἅγιον) 霊 (πνεῦμα) に [言い逆らつた] 者はすべて、『永 [遠の拷問 (βάσανος)] で』 (15) 永遠の拷問 (βάσανος) [で] 拷問される (βασανίζειν)。」

### 模倣の霊の起源 [36,15] — [39,11]

[そこで (δέ) 私は言] った、「主よ、その模倣の [霊] (ἀντίμιμον πνεῦμα) は [一体どこからやって来] たのですか。」

その時 (τότε) 彼は言った、「[ 約 12 文字欠損 ] の始めに (ἀρχή) ・ ・ ・私<sup>(84)</sup> が [ 約 9 文字欠損 ] の霊 (πνεῦμα) において、その (20) [ 約 7 文字欠損 ] が豊かなる者 (三人称・女性・単数) [と] 聖なる霊 (πνεῦμα)、すなわち [我々と共に] 労した者 — これは光のエピノイア (ἐπίνοια) のことであり、種子 (σπέρμα) と共に [ある] — [を] 見たとき、彼女は完全なる (τέλειος) [光の人] 間の (25) 揺らぐことのない [種族 (γενεά)] に属する人間たちの思考を呼び [覚ま] した。[37,1] さて、第一のアルコーン (ἄρχων) は気付いた、彼らが彼らの知恵の高さにおいて彼にまさっていることに。そこで彼は彼らの思考力を捕らえようと欲した。(5) 彼は無知で、[彼らが] 彼よりも賢いことを知らなかつたからである。彼は協議した。彼は宿命 (εἰμαρμένη) を生み出し、度量と時間 (χρόνος) [と] 時点 (καιρός) によって天 (複数) の神々と (10)

天使 (ἄγγελος) たちと諸々の悪霊 (δαίμων) [と] 人間 [たち] を縛 [り上げた]。それはあらゆるものが [そ] の (宿命の) 鎖に服 [して、すべてのものの上に] 彼らが君 [臨] するためであった。一ゆがんで [悪意に満ちた] 考えである。そして彼は [彼によって] 生じた (15) [すべてのわざを] 悔いた。彼は、人間 [のあらゆる放] 漫 (ἀνά[σ τεμα] )<sup>(85)</sup> の上に [洪水 (κατακλυσμός)] をもたらすことに [決] めた。しかし、「[プロ] ノイア」 ([πρ]όνοια) [の大きいなる] 者— (20) とはすな [わち、エピノイ] ア ([ἐπίνοι]α) のことである—が気付いて、[ノアに] (それを) 啓示した。[彼 (ノア) は] 人間たちに (そのことを) [告げ] 知らせた ([κη]ρύσσειν) が、彼らは彼を [信じ] なかった。それは [モー] ぜ [が] 彼らは方 [舟] (κιβωτός) に身を隠した』と言ったようにではなく、むしろ (ἀλλά) 彼らは或る場所 (τόπος) に隠れた (σκεπάζειν) ののである。[38,1] [ただノアひとり] だけではなく (οὐ μόνον)、むしろ (ἀλλά) 揺らぐことのない種族 (γενεά) の他の者たちも或る場所 (τόπος) へ入ってゆき、(そこで) (5) 光の雲で身を包んだ (σκεπάζειν) のである。そして彼らは高さところの支配を認識した。彼 (ノア) と共にいた者たちも (そうした)。その際、光が彼らを照らしていた。なぜなら、地上のあらゆる [る物] の上には (10) 暗 [闇] が注がれていたからである。彼 (ヤルダバオート) は彼の天使 (ἄγγελος) たちと共に決 [議] した。彼は彼の天使 (ἄγγελος) たち [を] 人間の [娘] たちのもとへ送った。それは彼らが [彼女たち] から子孫 (σπέρμα) [を生じさせて、(15) 享] 樂するためであった。彼らは初 [め成功しなかつ] た。そして成 [功しないことに気付いたとき]、彼らは [全員で互いに協] 議し、(上から) 下ってき [たあの靈 (πνεῦμα) を真] 似て (μίμη[σις]) 模 [倣の靈] ([ἀντίμι]μον πνεῦμα) [を] 造り出すことにしたのである。(20) 彼らの [天使 (ἄγγελος) たち] は彼女らの夫の姿 [に (κατά)] 形を [変え] た (με[ταβάλλειν])。[そして彼らの中にあつた] 暗闇でいっばいの靈 (πνεῦμα) で彼女たちを [満たした]。彼らは [悪意 (πονηρία)] から、<sup>(87)</sup> (25) 金、銀、贈り物 (δῶρον)、銅、[39,1] [約5文字欠損] 鉄の金属 (μέταλλον)、その他同類 (γένος) のあらゆる品種 (εἶδος) を彼女たちに持参した。そして彼らは彼女たちを道ならぬ行い (περισπασμός) へ [引き] 込んだ。それは彼女たちが自分たちの揺らぐことのない「プロノイア」(πρόνοια) のことを想い起こさないようにする<sup>(88)</sup> [ためであった]。(5) そして彼らは彼女たちを捕らえて、彼らの模倣の靈 (ἀντίμιμον[π]νεῦμα) による [暗] 闇の子らを生ませた。彼らの心は閉ざされてしまい、模倣の靈 (ἀντίμιμον πνεῦμα) によってかたくなにされて、(10) [今] 日に至るもなおかたくなになったままである。

結び 【39,11】 — 【40,9】

さて今や (οὖν) 至福なる (μακάριος) [父] 母なる者、あの憐れみに富む者が彼女の子孫 (σπέρμα) たちと共に (今まさに) 形を [取ろう] としている。<sup>(89)</sup> 最 [初に私は] 完全なる (τέλειος) アイオン (αἰών) の [もとへ昇った。(15) だが (δέ)、私がこれらのことを] 君に話すのは、君がそれを書き [留めて]、君と同じ霊の者たち (ὁμόπνευμα) に [密に伝えるためである]。これは揺らぐことのない [種族 (γενεά) の奥] 義 (μυστήριον) である。この母親はもう一度 [私] より先に<sup>(90)</sup> やって来た。(20) [彼女が] この世 (κόσμος) で [行ったあらゆる] わざ (は次のことである)。彼女は欠乏 (ὑστέρημα) を [立て直し] 続けた。私は [君たちに]、来たらんとしつつあることをさらに [告げ] よう。なぜなら (γάρ) [私がこれらのことを与えたのは]、君がそれを書き留めるため、また、それがしっ [かりと] ([ἀ]σφάλεια) 預け置かれるためである。」

それから彼は私に言った、(25) 「それらを贈り物 (δῶρον)、【40,1】あるいは (ἦ) [上着、<sup>(91)</sup>あるいは (ἦ)] 飲み物、あるいは (ἦ) [食] 物、あるいは (ἦ) 衣類、あるいは (ἦ) 何かその類いの他の物のために渡す者は誰であれ [呪] われよ。」 彼は (5) この奥義 (μυστήριον) を彼 (ヨハネ) に伝えた。すると [直] ちに姿が見えなく (ἀφαντος) になった。彼 (ヨハネ) は彼の仲間の弟子 (-μαθητής) たちのもとへ [行き]、救い主 (σωτήρ) が [彼] に語った言葉 [について] 彼らに語り伝え始め [た] (ἀρχεσθαι)。

(10) ヨハネの

秘められた教え (ἀπόκρυφον)

## 訳注

- (1) 以下【28,17】まで「救い主」の口に置かれた直接話法。後出注 62 参照。Tardieu は 6,19 から初めて訳出を開始するが、その根拠は不詳。
- (2) Krause と Kasser(v. 37) も同じ訳。但し、Krause が復元する本文 [inouattitôsch] erof pe の否定詞 in は不要。これを保持するために必要な否定相関詞 an が欠けている。それでも敢えて in を否定詞として保持すれば、「限定し難いものでもない」となって、意味上直前の「無限定ではなく」を反復することになる。
- (3)~(3) Kasser(v. 46) は“彼は(あらゆることを) [光の完成の中で] 自分自身に [自問しながら存在している] ので、やがてその [混じり気なき光を] 認 [識するだろう]。”
- (4)~(4) 6,16 の kata the etinaesch noei immos を前文、[nim] gar eirnoei ommof enech を挿入文、tinatschoos erok を後文と取る訳。
- (5) [nim] gar eirnoei immof の e 以下を「非本来的関係文」(W. Till, Koptische Grammatik, Leipzig 1970 4, § 461) と解する訳。
- (6)~(6) 7,7 以下で語られる他の神々(アイオーン)の成立を先取り。
- (7) Kasser(v. 54) は“その中に彼が住んでいたところの者を除いては”。但し、脚注(RThPh 97, p. 142, n. 1)で、我々の訳も可とする。
- (8) Tardieu, “霊の泉から生ける水が湧き出る”は過度に BG に合わせ過ぎた訳で、文法的にも不正確である。
- (9) 文字通りには「啓示の上に」。
- (10) 拙訳 BG の訳注 35 と全く同じ事情。Krause の訳文では、以下 9,18 までの文の区切り方が我々と異なり、「五個組」の組み合わせが不明。
- (11)~(11) 9,18 の「父」に対する同格表現とも取れる。
- (12) 原語  $\overline{xrs}$  を  $\chi\rho\iota\sigma\tau\acute{o}\varsigma$  ではなく、 $\chi\rho\eta\sigma\tau\acute{o}\varsigma$  の短縮形と取れば、「至善なる者」(Kasser) も可。拙訳 BG の訳注 38 と同じ消息。
- (13) あるいは「彼(見えざる霊)は彼(御子)の前に現れた」(Tardieu)。
- (14) 原語は不定冠詞を伴う形(BG の並行箇所 31,11 も同様)。
- (15) Tardieu は「御子」を主語とし、「見えざる霊」は直前の「思考」へ限定句としてかける。しかし、原文では「見えざる霊」が主語として明示されている。
- (16) 原語は不定冠詞を伴う形。
- (17) 原語は定冠詞を伴う形。
- (18) Krause と Tardieu は直前の「キリスト」と同格に訳す。
- (19)~(19) 写本 II の並行箇所 7,16 に従い、III 11,4 の pauto [gen] ês の前に目的語を表す im を補充して読む訳。Krause は“大いなる見えざる霊、すなわち、神的アウトゲネース、バルペーロンの息子は自らを完成して、大いなる見えざる霊の展開となった”Kasser の訳は構文不明。

- (20) Krause と Kasser は共に「展開」。我々の訳は並行する BG 32,6-7 と II 7,18 に意味上同じとなる。
- (21) 原語は不定冠詞を伴う形。
- (22) 「三つのもの」(主格)に対応する述語動詞(繫辞)がない構文。直後の「四つのもの」も同様。内容的にも、先行する文脈とのつながりが多少飛躍している箇所。諸訳もほぼ我々と同様に補充している。
- (23) 本文が損なわれている箇所。BG の並行箇所(33,18)から推すと「彼」=ダベイデ。
- (24) 原文は不特定多数を指す三人称複数能動形。
- (25) 直前の文の「アイオン」(原文では文末)から [ ] 内の同じ語(原文ではやはり文末)へ写字生の目が飛んだこと(Homoioteleuton)による本文脱落。
- (26) 本文が損なわれている箇所。BG の並行箇所(34,2-3)から推すと「彼」=エレーレート。
- (27) この後、BG 34,15-18「あらゆるものが聖なる霊の意志により、アウトゲネースによって堅くされた」に並行する本文が脱落していると思われる(Homoioteleuton)。
- (28) 不特定多数の三人称複数。受動態に訳すことも可。
- (29) 拙訳 BG の注 58 と同じ事情。「彼」は「見えざる霊」か「キリスト」のこと。
- (30) 男性・単数の定冠詞を伴う形。
- (31) 「あのアイオン」、「父・母・子なる三つの者」、「完全なる力」をすべて同格表現と取る訳。Kasser(v. 120)がこれに近い訳。Krause と Tardieu の訳文では、列挙された概念の相互関係が曖昧ないし不正確。
- (32) 上記注 28 と同じ事情。
- (33) 上記注 28 と同じ事情。
- (34) 未完了過去。Tardieu の現在形は誤訳。
- (35) 上記注 28 と同じ事情。
- (36) 後続の 15,4-9 と殆ど完全に重複。
- (37) おそらく *προϋνικον* (BG 37,11「情欲」)の誤記。
- (38) Krause:「彼女の内にいる衛兵ゆえに(それを)完成した」、Kasser:「彼女は彼女の内に(あった)守護の(霊)のゆえに、完全であった」、Tardieu:「彼女は自分の流出を完成した」。
- (39)~(41) 我々の訳は Kasser(v. 138)と同じ。文法的には BG の並行箇所(39,8-10)に沿って、「そして(彼=第一のアルコーン)は彼らのアイオンのために、そのいずれをも不朽の者たちを範型として(造り出した)」とも訳することができる。
- (40) 「生み出した者に対する無知」(目的の属格)の意か。BG 40,3-4 では明白に「生み出した者の無知」(主格的属格)。
- (41)~(41) III 17,7-13 のコプト語本文は、並行する BG 41,2-8 の場合と同様、ギリシア語原本に対する極めて稚拙な翻訳であると思われる箇所。我々の訳は Kasser(v. 156-159)に最も近い。拙訳 BG の訳注 73 に予示した III 6,-12 の試訳は放棄する。「上なる世

- 界の栄光によって呼ばれるときの名前」(8-10行)が二重であるというのは、①真実、すなわち、真の認識(グノーシス)に即して彼ら(諸力たち)の本性を暴露する名前、②サクラスが想像に任せてつけた名前の二重性を指すと思われる。
- (42) 引き続き文意がよく通らない箇所。文頭の「その栄光によって」の「栄光」は前注の①の栄光を、「これらによって」は同②の栄光を指すと思われる。BGの並行箇所(41,8-12)の方はさらに難解。
- (43) Till / Schenke S. 124 (Anm. 42,16)の提案に従う。Krauseはἀφιστάναι。
- (44) 未完了過去。並行箇所BG 43,3は現在完了第一型。
- (45) e a(21,8)のeを継続用法(W.Till, Koptische Grammatik § 331)と取る訳。Kasser(v. 229)は付帯状況(tandis que)に解する訳。
- (46) 拙訳BGの訳注88(BG 47,12)と同じ事情。
- (47) Krauseと共にBG 48,2に基づいて推定。Kasser, RThPh 99(1966)174, n. 2は「人間の形で」と推定。
- (48) 「首を垂れて見た」の意味を含む点はBG 48,6と同様(拙訳BG訳注92参照)。
- (49) 以下「第七の知恵」まで同様に補充して読む。
- (50) ορμοςは文字どおりには「鎖」あるいは「紐」。BGの並行箇所(51,1)は欠損。Till / Schenkeはαρμος「関節」と復元。
- (51) 拙訳BG訳注101と同じ事情。
- (52) 現在完了第一型を過去完了の意味にとる訳。拙訳BG訳注107参照。
- (53) 前注と同じ事情。
- (54) 原文は理由を表す状況文(Umstandssatz)。BGの並行箇所(52,17-19)は独立文。この違いを正確に訳すのはKasser(v. 407)のみ。KrauseとTardieuはBGに同化させる訳。
- (55) BG 53,2に従い、主語を三人称・女性・単数に復元する訳。Krauseは三人称・複数=「天使たち」(24,5)を主語とする訳。
- (56) (Krauseはこの箇所の約4文字文の欠損の復元を断念している。しかし、BGの並行箇所(54,1-2)から十二分に復元が可能で、Kasser(v. 412)とTardieuも我々と同じ訳文。但し、この訳(読み)では25,21のesnatachoのes(未来第三型の女性・単数の人称接頭辞)が浮いたままとなる。
- (57) Kasser(v. 414)は「下を見やった」(BG 54,9についても同様)。おそらくIII 22,1/BG 48,6と同じような姿勢を考えた訳(前注48参照)。但し、脚注(RThPh 99/1966, p.4, n.1)で「同意した」も可とする。Tardieuもs'étant alors penché (vers lui)。
- (58) BG 55,8-9は「反逆の霊」(ἀντικείμενον πνεῦμα)。Tardieuは両者の違いを無視して一様に「偽装した霊」(esprit travesti)。
- (59) 拙訳BG訳注116と同じ事情。「彼ら」は26,3-14に接続。
- (60~60) 訳出困難な箇所。我々の訳では、III 27,15/BG 56,11のtscheを「『生命』の木として」

と取る訳で、この点では Tardieu と Till / Schenke に近い。Krause は単純に無視して名詞文に訳す：「彼らが置いた木は命の木である」。Kasser(v. 430) と Tardieu はいずれも 27,14 の「木」(pschen) を一旦 *nominativus pendens* に取って、次行(27,15)の「私が君たちに告げよう」以下の文でその構文上の役割を限定し直す訳：「彼らの木、すなわち、彼らが、これは命の木である、と言いながら置いた木、その木について私は君たちに告げよう」。しかし、原文には下線部に該当する語句(限定句)はない。

- (61) 三人称・女性・単数。文脈上は「エピノイア」も可能だが、BG の並行句(57,16)は「戒め」。
- (62) 写本劈頭から続く「救い主」の講話(直接話法)がここで初めて一旦閉じる。前出注(1)参照。
- (63) 三人称・男性・単数。文脈上「滅び」か「アダム」を受ける。
- (64)~(64) 「彼」が三つ連続する箇所。敷衍すれば、「ヤルダバオートは彼(アダム)が自分より……」。
- BG の並行箇所(58,8-9)はアダムを指す二番目の「彼」の代わりに、「彼女(エバ)」。
- Tardieu はこれを写本 III の読み単純に同化させた上で、「アダムは自分(アダム)がヤルダバオートより……」と訳すが、内容的にも明らかに文脈に矛盾している。
- (65) Krause の提案(S. 88 の脚注)に従い、29,16 の後半 *nerē pkake* を *ē nerē pkake* = 未完了過去の状況文と読む訳。Kasser(v. 445) はそのまま読んで、独立の単文として訳す。
- (66)~(66) この文を我々のように引用文の一部と見なすのは Kasser(v. 450) と Krause (但し、II 23,11-14 では地の文の扱い)。地の文と見るのは Tardieu 。
- (67)~(67) 写本によって読みの違いが大きい箇所。BG 60,12-14; 「何故なら、彼らはあの母親の伴侶によって遣われ、彼女(母親)を立て起こすであろうから」、II 23,14-20; 「何故なら、彼に彼の伴侶が送られるであろうから。そして彼は父と母を離れて妻と結び合い、二人はひとつの肉となるであろう」。三つの写本の違いを最も正確に訳出するのは Kasser(v. 451)、反対に最も不正確なのは Tardieu 。
- (68)~(68) Kasser(v. 453-454) は「高きところの権威によって、また、エピノイアがその木を使い、鷲の姿で教えた認識の啓示によって」と訳して、直前の文にかける。
- (69) 拙訳 BG の訳注 139 参照。Tardieu は BG へ同化する訳。
- (70) Tardieu は BG 63,16 「あの母親が」に同化する訳。
- (71) 直前の「彼女自身のものなる霊」、または「アダム」のこと。
- (72) 「あの母親」のこと? BG 64,4 は三人称・男性・単数で「霊」のこと。
- (73) 三人称・男性・単数。直前の「アイオン」あるいは 32,15-16 の「種子」を受ける。BG 64,11 でも同じ消息(拙訳 BG の訳注 143 参照)。
- (74) 現在時称第二型。BG 65,13 の未完了過去形は文脈に不適合。
- (75) Krause の脚注(S. 96)に従って、*etsnaparalambane* を *etouna-* と読む訳。
- (76) Tardieu は III 33,19 (BG 66,6-7) を後続の文へつけて、「彼らは永遠の生命と召命とにふさわしい者であるとの確信をもって、戦い……忍ぶのである」と訳す。



- (77) 現在完了第一型。並行する BG 67,2 は同じ動詞の Qualitativ の形 (nêu) で、「到来しつつある」の意。Kasser(v. 487) がよくこの違いを訳し分けている。
- (78) Krause が「生命の霊」と「模倣の霊」を同格に訳すのは不適切。
- (79) 34,18 の接続法 (inseplana) は前行の習慣的現在 (schausôk) を継続するもの。三人称複数形は受動態で訳す。
- (80) Krause と Tardieu は原語の imptêrif を副詞に取って、「全く」と訳す。しかし、副詞形は厳密には eptêrif。
- (81) 中動形あるいは受動形に取って、自動詞として訳す。
- (82) 35,18 を Krause は [esschantschôk schas] outschai と復元するが、三人称・女性・単数(下線部)が文脈上困難。Kasser(v. 499)はこの復元に沿った訳。我々は [euschantschôk schau] outschai と三人称複数に復元する訳。Tardieu がこれに同じ。
- (83) 「その後に従った者」は、Till / Schenke(BG 70,1の脚注)が指摘するように、παρακολούθησις = 「理解」、「了解」の下手な直訳かも知れない。しかし、このギリシア語の単語には「誰々の後に従うこと」の語義はないから、むしろ「誤訳」というべきである。その際、この誤訳は、直後の 36,1-2 に ἀκολουθεῖν という動詞が出て、これが「後に従う」の意味であることに引かれたためかも知れない。
- (84) Krause と Tardieu は BG 71,7-8 に従って、「憐れみ」と補充。但し、Krause の pesei [ ] の読みでは、BG の pesna [ ] と合致しない。Kasser (v. 509) は re[semblance?] と復元。
- (85) Kasser(v. 525) : édifice; Tardieu : productions; Krause : Überheblichkeit.
- (86) Krause のみ「自分たちを」と再帰的に訳す。
- (87) 諸訳はこの部分を前文にかける。Till / Schenke の BG 訳が我々と同じ。
- (88) 39,4 の e ]timteuirpmeeue を Krause と共に e ]timtreuirpmeeue と読む訳。
- (89) 39,12-13 の nase [tschi μo] ρφ [η] は翻訳が困難な箇所。我々の訳は、下線部の最初の二文字 na を動詞「来る」の Qualitativ (=今まさに～しようとしている : W. Westendorf, Koptisches Handwörterbuch, Heidelberg 1965 / 77, S. 116 参照)、次の二文字の順番を入れ変えて es と読み、同時性を表す状況文 (W. Till, Koptische Grammatik § 329) と取るもの(主語は三人称・単数・女性)。Krause は単純に未来に訳すが nase をどう理解しているか不明。Kasser(v. 542) は並行箇所の BG 75,17 (estschi) に沿って、現在形の訳。Tardieu : qui va et vient en sa semence は意訳。
- (90) 時間的意味の「先に」。場所的に「私の前に」と訳さない理由については、拙訳 BG の訳注 179 を参照。
- (91) II 31,37 に基づく Krause の推定。Tardieu は「あらゆる贈り物」。